

トビウオ通信 (R2 第3号)

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

《令和2年度上半期浮魚中長期漁況予報》

2019年度第2回対馬暖流系マアジ・サバ類・イワシ類長期漁海況予報(R2年3月26日西海区水産研究所発表)より、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の令和2年度上半期(4~9月)の中・長期的な漁模様の予測をします。

山陰沖における漁況(来遊)予報〔令和2年度上半期(4~9月)〕

マアジ:前年を下回る

マサバ:前年並み

マイワシ:前年を上回る

ウルメイワシ:前年並みか前年を下回る

カタクチイワシ:前年並み

※本文中で「上半期」は4~9月、「下半期」は10~翌年3月(令和2年3月は速報値)、「平年」は過去5カ年(平成26~30年)の平均値、「前年」は令和1年度上半期を示します。

マアジは前年を下回る

東シナ海~日本海南西海域の漁況

東シナ海~日本海南西海域における大中型まき網によるマアジの漁獲量は、増減を繰り返し、2万~5万トンで推移しています(図1)。また、鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和1年11月~令和2年1月の漁獲状況は、前年・平年並みでした。同海域における今後(4~9月)の漁況は、沖合域で前年並み、沿岸域で前年・平年並みと予測されています。

山陰沖の漁況と今後

島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は平成16年度以降、1万~4万トンで推移しています(図2)。令和1年度下半期は2,717トンの漁獲があり、前年同期(7,140トン)の38%、平年同期(10,818トン)の25%でした。

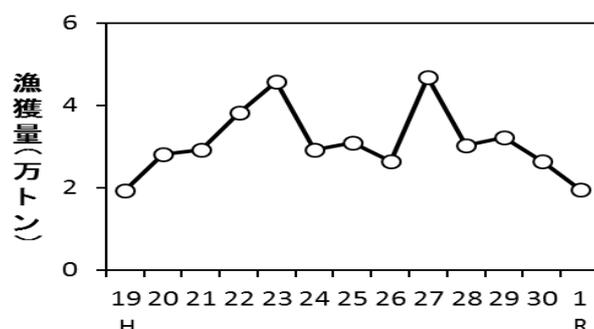


図1. 東シナ海~日本海南西海域の大中型まき網によるマアジ漁獲量の推移

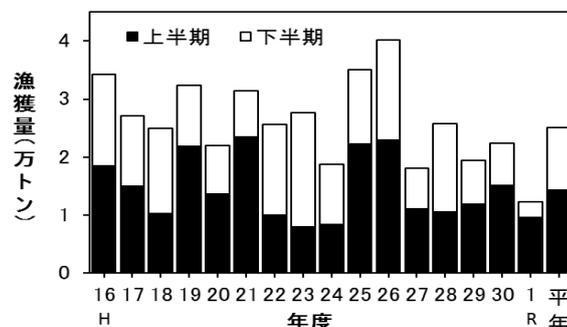


図2. 島根県の中型まき網によるマアジ漁獲量の推移(平年はH26~30年の平均値)

令和1年の漁獲の主体は平成30年生まれ（R1年時点1歳魚）が中心でした。マアジの総漁獲量は上半期、下半期ともに前年を下回りました。

今後の漁況（4～9月）は、漁獲の主体となる1歳魚（大きさ15～20cm：R1年生まれ）と2歳魚（大きさ20～25cm：H30年生まれ）の山陰沖への来遊状況と、夏季以降漁獲対象となる0歳魚（大きさ5～15cm：R2年生まれ）の加入状況によって決まります。2歳魚の資源水準は前年を下回るとされています。1歳魚の資源水準は、山陰沖での直近の漁獲状況とマアジ新規加入量調査*の結果（図3）から前年並みか前年を下回ると予測されます。0歳魚の資源水準を予測するのは困難ですが、東シナ海におけるマアジの稚魚の分布量と高い相関が見られる4月半ばの好適水温帯面積は、令和2年は前年を下回ると見込まれることから0歳魚の資源水準は前年を下回ると考えられます。以上より、今後（4～9月）の来遊量は、主体となる1歳魚が少ないことを反映して前年を下回ると予測します。

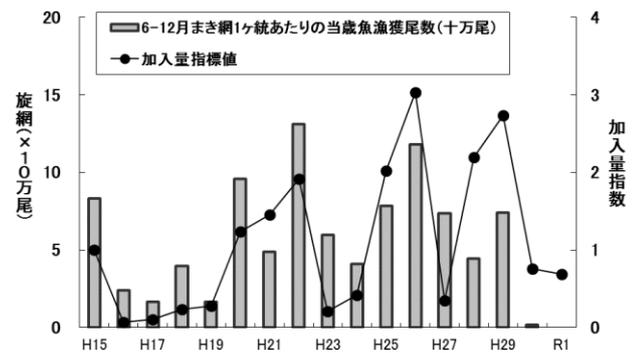


図3. マアジ新規加入量調査による加入量指数*と6～12月におけるまき網（境港）1ヶ統あたりの0歳魚の漁獲尾数

*マアジ新規加入量調査：マアジ0歳魚の加入量を早期に把握するための調査

*加入量指数：マアジの新規加入量調査においてその年の0歳魚の加入量を数値化したもの。ただし平成15年を1としている。

マサバは前年並み

東シナ海～日本海南西海域の漁況

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、増減を繰り返して2万～7万トンで推移しています（図4）。また、鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和1年11月～令和2年1月の漁獲状況は、前年・平年を下回りました。同海域における今後（4～9月）の漁況は沖合域で前年並み、沿岸域で前年・平年並みと予測されています。

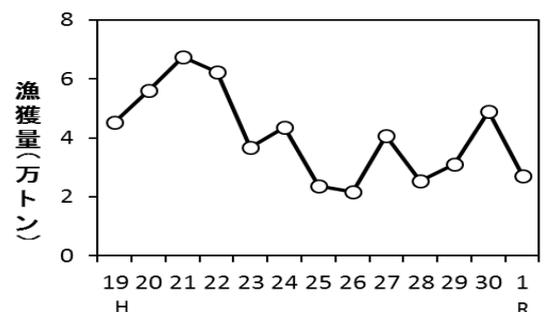


図4. 東シナ海～日本海南西海域の大中型まき網によるマサバ漁獲量の推移

山陰沖の漁況と今後

島根県の中型まき網によるサバ類（島根県で漁獲されるサバ類はほとんどがマサバ）の漁獲量は、盛漁期にあたる下半期の経年変化をみると、5千～2万トンの間で増減を

繰り返して推移しています(図5)。平成27年以降は上半期にも漁獲が増加している傾向にありましたが令和1年度上半期の漁獲量は1,984トンで、平年同期(4,814トン)の41%でした。令和1年度下半期の漁獲量は2,986トンで、前年同期(8,563トン)の35%、平年同期(13,348トン)の22%でした。

今後の漁況(4~9月)は、1歳魚(25~30cm: R1年生まれ)が漁獲の主体となり、夏以降は0歳魚(15~20cm: R2年生まれ)も漁獲されます。1歳魚の資源水準は、前年を下回るとされています。また0歳魚の資源水準は予測が困難ですが、親魚量は微増であるため前年並みと予測されています。今後(4~9月)の来遊量は、東シナ海~日本海域の漁況及びこれらのことから不漁であった前年並みと予測します。

マイワシは前年を上回る

鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和1年11月~令和2年1月の漁獲状況は、前年・平年を大きく下回りました。

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は、平成23年から増加し(図6)、平成26年を除いて平成23年以降は1万~3万トンで推移しています。令和1年度上半期はH26年に次ぐ不漁となりましたが、下半期の漁獲量は11,560トンで前年同期(689トン)の1677%、平年同期(6,385トン)の181%の漁獲があり豊漁となりました。

今後の漁況(4~9月)は、漁獲の主体となる1~2歳魚(大きさ15~20cm: R1年~H30年生まれ)と夏以降の0歳魚(大きさ15cm以下: R2年生まれ)の来遊量で決まります。2歳魚の資源水準は前年並みと考えられ、1歳魚は前年を下回ると予測されます。また0歳魚の予測は困難ですが、直近の漁況では日本海西部沿岸に1歳魚以上の来遊が多く確認されていることから前年を上回る可能性が高いです。以上より、今後(4~9月)の来遊量は、平成26年以来の低調であった前年を上回ると予測します。

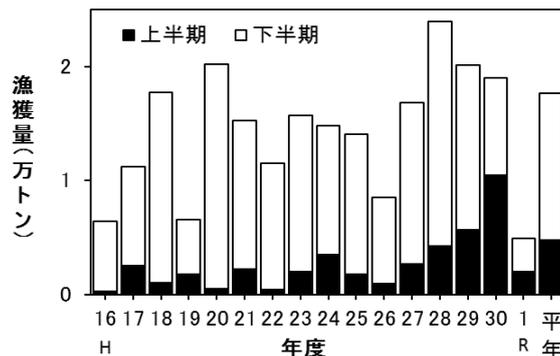


図5. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移(平年はH26~30年の平均値)

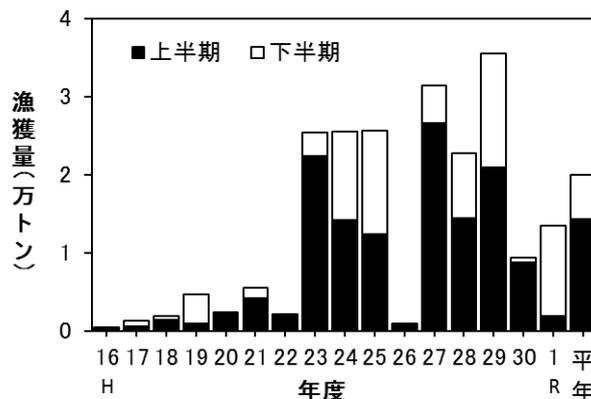


図6. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移(平年はH26~30年の平均値)

ウルメイワシは前年並みか前年を下回る

鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和1年11月～令和2年1月の漁獲状況は、前年・平年を大きく下回りました。

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成23年以降増減はありますが、近年は増加傾向にあります(図7)。令和1年度下半期の漁獲量は2,796トンで、前年同期(2,436トン)の115%、平年同期(1,979トン)の141%でした。

今後の漁況(4～9月)は、1～2歳魚(大きさ18cm以上：R1年～H30年生まれ)と夏以降の漁獲に加わる0歳魚(大きさ5～15cm：R2年生まれ)が漁獲の主体となります。1歳魚の資源水準は、前年並みとされています。0歳魚の資源水準を予測するのは困難ですが、産卵量調査の結果より前年並みと考えられています。以上より、今後(4～9月)の来遊量は漁場が形成されて非常に豊漁であった前年並みか前年を下回ると予測されます。

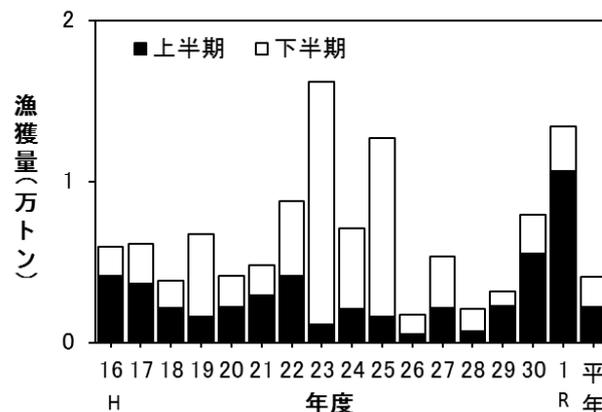


図7. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移(平年はH26～30年の平均値)

カタクチイワシは前年並み

鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和1年11月～令和2年1月の漁獲状況は、前年・平年を大きく下回りました。

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、平成25年以降減少しています(図8)。令和1年度下半期の漁獲量は232トンで、平年同期(1,286トン)の18%でした(前年同期は漁獲なし)。

今後の漁況(4～9月)は、漁獲の主体となる1～2歳魚(大きさ12～14cm以上：R1年～H30年生まれ)と夏以降の漁獲に加わる0歳魚(大きさ5～10cm：R2年生まれ)が漁獲の主体となります。1歳魚の資源水準は前年並みと予測されています。0歳魚の資源水準を予測するのは困難ですが、九州西岸の上半期(4～9月)の漁獲量は近年比較的安定していることから前年並みと予測されています。以上より、今後(4～9月)の来遊量は前年並みと予測します。

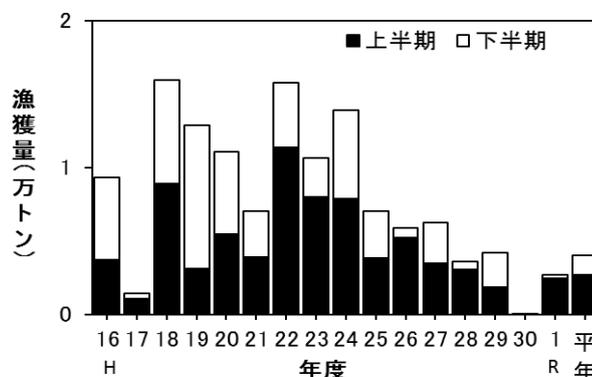


図8. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移(平年はH26～30年の平均値)